



Book Talk

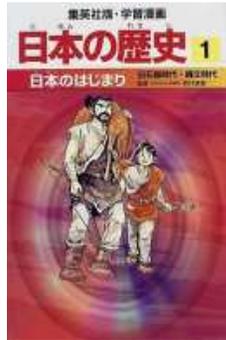
編集・発行 海南高校図書部
第26号 2016.02.29

はじめに

社会科の小竹です。「BookTalk」の執筆を依頼していただいたのを機に、自分の読書歴を振り返ってみた。そこでハッと気づかされたことは、「本との出会いが、これまでの自分の人生に多大な影響を与えているのではないか?!」ということである。

本との出会い

小学生時代。家に『学習漫画日本の歴史』シリーズがあるのを見つけた。姉が今は亡き祖父に買ってもらった本らしい。読み始めるとおもしろく、全20巻を読破したことを覚えている。歴史に興味をもった。



文学との出会い

中学生時代。歴史小説を手にとった。最初に読んだのは、山岡荘八歴史文庫シリーズ『織田信長』(全5巻)である。漫画とは違い、1冊を読み終えることに苦労した。時間もかかった。でも、内容がおもしろかった。史実ではなく小説ではあるが、そこに描き出される歴史上の人物の「生き方」に魅力を感じた。苦労して読破したときの達成感も初めて味わった。その後、同シリーズの『毛利元就』、『豊臣秀吉』、『伊達政宗』を読んだ。さすがに、『徳川家康』(全26巻)には手を出さなかったが…。

小説を通じて、歴史用語をたくさん知った。日本の地名もたくさん知った。いつしか高校入試の面接で「得意な教科は何ですか?」と聞かれると、迷いなく「社会科です。とくに日本史が好きで、戦国時代にとっても興味があります。」と答えるようになっていた。受験した学科は、自然科学科。「得意科目は数学と理科です」と答えるべきであったらう…。



高校生時代、読書歴なし

自分が高校生の時、読書をした記憶はない。勉強と硬式野球に明け暮れた。

事前に知ってはいたが、自然科学科は数学と理科の授業が多かった。苦手意識があったので、授業についていけるように必死で勉強した。「授業中に寝る」などということは決してしなかった。先生に対して失礼であるし、自分を余計に苦しめるだけ。部活でどんなに疲れていても、授業は大切にしたい。帰宅後、夜はバットの素振りの時間に充て、朝早くに起床。授業の復習・予習をして学校に行った。高校生時代はそんな生活だった。心待ちにしていた日本史の授業は、普通科よりも時間数が少なく、しかも猛スピード。でも、日本史の授業が一番楽しかった。もっとも勉強したいと思った。

野球部では、本気で甲子園を目指した。同級生の野球部員は26人。毎日の猛練習と熾烈なレギュラー争いが待ち受けていた。最後の夏の大会は、準々決勝で惜敗した。今でも、試合後の監督の涙が忘れられない。教師という仕事の魅力を感じた一瞬であった。

高校卒業後の進路を考えたとき、自分のなかに迷いはなかった。将来、高校の社会科教師になることである。教育学部に進学するという選択肢もあったが、人文学部に進学した。理由は、より専門的に日本史を勉強したかったから。センター試験を受験した後、いくつかあった志望校のひとつに出願し、合格することができた。

振り返れば、高校生時代にもっと読書をしておけばよかったのかもしれない。いや、すべきであったと思う。でも、その余裕はなかったな…。

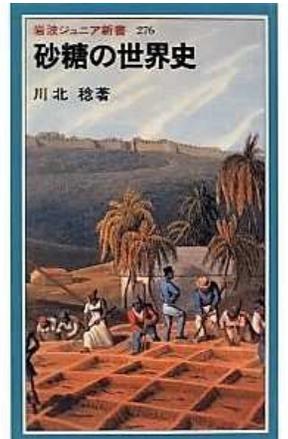
学問との出会い

大学進学後、自由な時間が一気に増えた。読書をする時間はたっぷりあった。初めて本格的に読書をした。そのきっかけは、2つある。

1つは、全国から集まってきた同級生との出会いである。一緒に大学の授業を受けるなかで、「みんな俺よりも知識が豊富なな」「みんなこれまでたくさん読書をしてきたんやな」ということを実感した。高校生時代に読書をしなかった自分に、焦りを感じた。

2つ目は、入学当初の講義での、先生のひと言である。「大学とは、教養を身に付けるところである。読書をしなさい。そのためには新書を読みなさい」。新書を読もう!と思った。歴史だけでなく、政治・経済・社会・教育など、さまざまなジャンルの新書を読んだ。新書は、古本屋に行けば1冊数百円で買える。教養を身に付けるには最適のアイテムである。

今でも心に残っているのは、岩波ジュニア新書の川北稔『砂糖の世界史』である。17世紀、イギリスで紅茶に砂糖を入れ、優雅に午後のティータイムを楽しむ人。アフリカ大陸で「奴隷狩り」に従事する人。西インド諸島のサトウキビプランテーションで黒人奴隷として使役される「人」。この3人は、密接につながっている。一部の人の「優雅さ」の背景に、多くの人の血と涙がある。現代社会においても、この構図は変わっていないのではないか?社会の矛盾にもっと目を向けるべきではないのか?この本は、自分にそう問いかけているような気がした。



大学2年生以降は、専門的な日本史の研究をした。史料としての歴史書や古文書も読んだ。研究論文が掲載された専門書も読んだ。そこには、趣味で学ぶ歴史とは別世界の、学問としての歴史学研究の世界があった。現代社会のなかに問題意識を感じ、その問題を過去にさかのぼって追究し、よりよい未来を築く

ための提言をする。それが歴史学研究の世界である。「言うは易く行うは難し」であり、自分の研究に悪戦苦闘した学生生活であったが、歴史を学ぶ意義をかみしめた時期でもあった。

教職に就いて

今、幸いにも高校の社会科教師をさせていただいている。授業の準備のために、「日本史」や「現代社会」の勉強をする。新聞で現代社会の動向をチェックする。「現在」という時代に大きな問題意識を感じ、「今こそ歴史と真摯に向き合わなければならない時代である」とも思う。授業の教材を求めて読書もする。読書をすれば、そこに新しい発見があったりもする。新たな発見や気づきに出会えることが、自分にとって読書の醍醐味である。

読書とは、新しい世界に出会うこと。それは旅と似ている。自分自身の五感を使って、知らない世界をもっと知りたい。教養を身に付けたい。それが、ものごとの本質を見抜く力になるし、自分の生き方にも影響を与える。生徒のみんなには、あなた自身のために、ものごとの本質を見抜く力を身に付け、力強く人生を歩んでもらいたい。本とともに…。

自分の読書歴を振り返って